特別活動部会（小学校）

県研究主題
望ましい集団活動を通して、児童一人ひとりの自主的、実践的な態度の育成と豊かな人間関係をはぐくむ指導の充実と評価の改善・工夫

提案１　　提案者　大川　美佳（相模原地区）

＜研究主題＞
「自主的、実践的な態度を育てる学級活動」 ～「楽しく豊かな学級・学校生活をつくる特別活動（小学校編）」の実践化を通して～

１　提案内容

話合い活動の経験が少ないことから、自分たちの力で学級をつくっていくという意識がやや希薄であった。そこで、「楽しく豊かな学級・学校生活をつくる特別活動（小学校編）文部科学省国立教育政策研究所教育課程研究センター作」の指導資料を活用し、授業改善に取り組んだ。「学級がよくなった」「自分たちの力でできた」という成功体験を多く経験することで、自主的・実践的な態度を育てることにつながると考えた。また、その他にも、他学年との交流学級会に取り組んだり、学級会で学んだことを他教科の授業につなげたりしていくこととした。

（１）研究の視点

①　計画委員会

児童の実態から、立候補制をとった。高学年から始まる委員会活動に向けて、学級内でも委員会を立ち上げる。

②　議題の収集、選定

児童の実態から、議題ポストを置かず、話合いの中で議題を選定する。

③　計画委員会での活動計画の作成

計画委員と担任とで話合いの進め方を確認し、計画書を作成する。

④　話合い活動

「めざす学級活動10の視点」を意識して話合い活動に取り組む。

司会だけではなく、全員が流れを把握していけるよう、学級会の仕組みを説明したり、時間などを意識したりするよう声をかける。

⑤　話合い活動の意欲を高める工夫

ゴールを共有することで、期待感を高めようとした。

全員でつくる学級会を目指すことで、話合いに対する意欲が向上する。

⑥　振り返り

具体的な場面や発言の内容を伝えることで、次の学級会につなげられるようにする。

⑦　評価

学級会の様子を記録する。

観察法だけでは評価の偏りが生じるため、学級会シートの記述と合わせて評価をする。

（２）授業実践

①　４月14日　第１回目「掃除分担場所の人数を決めよう」
何を話し合っているのか戸惑う児童が多い。

②　２学期（９月）学級会のめあてを決めよう
他者を意識した声かけが出てきた。発言者の広がりが見られるようになってきた。

③　３学期（３月15日）「キーア組最後の日までの目標を決めよう」
めあてに沿った発言が増えた。意見に対して、反応がよく出るようになった。
意見をまだ言っていない児童に対して、意見を聞きたいと周りが求める。
→それに応える児童。言いづらい児童に寄り添い、気持ちを引き出そうとする児童。
司会グループ以外でも、全体の流れを意識するようになってきた。

２　協議内容

・初めての学級会での指導は？→教員が、最初に学級会の説明をした。
・クラスでの委員会というのは？→係活動とは別に組織されたもの。
・学級目標と最後に話し合った目標とは別？
→別のもの。学級目標に対する振り返りは行った後で、最後の１週間、自分たちでどうしていきたいのかを話し合った。
・学校全体への広がりを求めるには、代表委員会から各クラスにおろしていく方法も一つ。
また、校内研究で取り組むことは効果的。一人ひとりの実践とするとなお浸透する。
・議題を話し合う、というのは新しい発想。最後の学級会で決まった「１秒１秒を大切にする」というのは素晴らしいが、これが具体的な姿で共有されることで、児童が取組を見つけやすくなるのではないか。議題の選定の大切さを改めて感じた。

３　まとめ

・昨年度、全国特別活動研究会神奈川大会があった。県内各地に多くの熱き特活人がいる。
・「自主的、実践的」は学習指導要領改訂でも「一層」必要なものとして位置付けられている。
・特別活動のリーフレットが平成25年に初めて出された。これにより、ある程度の基準を全体で共有することができるようになったが、この形に当てはめるばかりでなく、実態に即した形で活用していくことが大切である。
・特別活動の充実は、よりよい学級経営につながる。
・学習指導要領があるにも関わらず、全国でもばらつきが出てしまうのが現状であり、校内で共通理解を図ったり、校内研修で特別活動を扱ったりすることで、広めていくことが大切である。
・特活主任として、まずは、自身の授業の中で特別活動をがんばることが広めるもととなる。
・企業の話で、現在ある製品の10年先までの見通しはあるが、すぐに出さず少し先を示す。授業も同様で、真似できないような授業ではなく、誰もが取り組みやすいモデルを示すとよい。
・話合い活動時、座席のスタンダードはコの字型である。理由は、前向きなどでは顔が見えないコミュニケーションになってしまうためである。また、計画委員は輪番制を基本とし、スペシャリストを育てるのではなく、全員が体験することで、話合いになった時に計画委員の気持ちや考えを共有できるようになるとよい。

提案２　　提案者　　古瀬　公一（県西地区）

〈研究主題〉
「児童の主体性を育むための集団活動」
～異学年の交流や運動に親しむ場の設定を通して～

１　提案内容

（１）テーマ設定について

・異学年交流ができる環境が整った。
・人間関係の構築、自己を生かす能力の伸長をねらった。

（２）テーマにせまるための具体的な手立て

①　よりよい人間関係の構築に向けて
・低学年にアンケートをとり、委員会へのメッセージを書いてもらうようにした。

②　自己を生かす能力の伸長に向けて
・振り返りカードの工夫をした。以前の自分と現在の自分を比べることができるような構成にした。
・打ち合わせ、振り返りの時間を確保し、見通しをもち、成長を実感できるようにした。

（３）実践

〈体育委員会の取り組み〉

①　「長縄上達講座」「開成チャレンジデー」
・低学年児童のスキルをアップすることを活動の目標とした。
・どのように低学年に教えたらよいか分からない児童がいた。
・講座の後低学年の児童に感想を聞いた。
・３年生→２年生→１年生の順に行い、振り返りでは立ち位置や声かけなど改善点がでたが、そのたびに活動が改善されていった。
・チャレンジデー当日は上達講座の経験を生かした活動ができた。

②　新体力テストチャレンジ週間
・「長縄上達講座」の反省を生かし、役割分担など工夫して活動できた。
・２週間の活動の中で、毎日振り返りをおこない、改善し、自主的な活動が増えてきた
・途中で意識が低くなってしまう児童もいた。

③　短縄集会
・児童が目標を設定し、新しくつくった活動を行った。
・ポスター作りや表彰など工夫して活動していった。
・当日はいくつか問題がでたが、臨機応変に対応できるようになってきた。
・集会以降も短縄に親しむ児童が増えた。

２　協議内容

（１）児童会活動について

・委員会の活動を具体化することで、児童会スローガンにむかっていくよう展開した。
・活動の振り返りだけでなく、児童会スローガンについて振り返ることも大切である。
・スローガンを意識することで新しいアイディアがでてくる。
・代表委員会を活用すると全体に広がっていく。
・活動の価値（なぜ活動がうまくいったかなど）を振り返ることが大切である。

（２）主体的な活動について

・児童が主体的に動くことができるようになったポイントは、「集まるのがあたりまえ」ということを意識できるようにしたことと、他の人からの目を大切にして認めてもらえるようにしたこと。
・事前の打ち合わせでは、児童同士の対話を意識した。
・繰り返し活動の大切さは委員会活動でも同じである。
・これから振り返りの視点に、自分のめあてにむけての振り返りができるようにするとよい。
・他学年から活動の感想をもらう機会がないので、そういう場があるとよい。
・職員間の共通理解をし、全校で活動を盛り上げていくことが大切である。

３　まとめ

（１）主体性のある活動

・主体性のある活動にするには、望ましい集団活動であることが前提。望ましい集団活動には６つの条件が示されている。

＜　6つの条件　＞
1　活動の目標を全員でつくり、その目標について全員が共通の理解をもっていること。
2　活動の目標を達成するための方法や手段などを全員で考え、話し合い、それを協力して実践できること。
3　一人一人が役割を分担し、その役割を全員が共通に理解し、自分の役割や責任を果たすとともに、活動の目標について振り返り、生かすことができること。
4　一人一人の自発的な思いや願いが尊重され、互いの心理的な結び付きが強いこと。
5　成員相互の間に所属感や所属意識、連帯感や連帯意識があること。
6　集団の中で、互いのよさを認め合うことができ、自由な意見交換や相互の関係が助長されるようになっていること。

・少々の失敗に対して適切に指導したり、あたたかく見守ったりすることが大切。なすことによって学ぶことができるようにする。失敗の経験を生かすことができる児童を育てる。より多くの活動の場を設定することでそのような経験をできる児童が増えてくる。

（２）児童の主体性を持続と自己有用感

・主体性を持続していくために大切なのは自己有用感。自己有用感をもつことができるようにすることで、児童は意欲的に意識的に活動に取り組むことができる。また、リーダーシップやフォロワーシップ、特にフォロワーシップを育てていくことが望ましい人間関係づくりにつながる。フォロワーシップがリーダーの意識を高めていく。他者からの称賛はとても励みになる。